

神経疾患診療ガイドラインの発行にあたって	v
序	vii
略語一覧	xviii

序章 パーキンソン病とは

1. パーキンソン病の診断	2
2. パーキンソン病の疫学	4
3. パーキンソン病と遺伝子	6
4. パーキンソン病と環境因子	9
5. パーキンソン病の運動症状と非運動症状	11

第 I 編 抗パーキンソン病薬, 外科手術, リハビリテーションの有効性と安全性

資料 1. 各薬剤の特徴	20
資料 2. L-ドパ換算用量	24

第 1 章 L-ドパ 25

1. L-ドパ単剤	25
2. L-ドパ/DCI 配合剤	26
3. 長時間作用型 L-ドパ/DCI 配合剤	28
4. L-ドパ/DCI/COMT 阻害薬配合剤	30
5. 空腸投与用 L-ドパ/カルビドパ配合剤 (L-ドパ持続経腸療法)	31

第 2 章 ドパミンアゴニスト 34

1. プロモクリプチン	34
2. ペルゴリド	36

3. タリペキソール	38
4. カベルゴリン	39
5. プラミペキソール(速放剤, 徐放剤)	41
6. ロピニロール(速放剤, 徐放剤)	46
7. ロチゴチン	50
8. アポモルヒネ	55
第3章 モノアミン酸化酵素 B (MAOB) 阻害薬	58
1. セレギリン	58
2. ラサギリン	60
第4章 カテコール-O-メチル基転移酵素 (COMT) 阻害薬	63
第5章 アマンタジン	65
第6章 抗コリン薬	68
第7章 ドロキシドパ	70
1. すくみ足・無動に対する効果	70
2. 起立性低血圧に対する効果	71
第8章 ゾニサミド	73
第9章 イストラデフィリン	75
第10章 手術療法	77
I. 破壊術	77
1. 視床腹中間核破壊術	77
2. 淡蒼球内節破壊術	79
3. 視床下核破壊術	80
II. 脳深部刺激療法 deep brain stimulation (DBS)	81
4. 視床腹中間核刺激療法	81
5. 淡蒼球内節刺激療法	82
6. 視床下核刺激療法	84
第11章 パーキンソン病のリハビリテーション	87
第12章 公的制度・費用対効果	90
1. 公的制度	90

第Ⅱ編 Evidence Based Medicine の手法を用いた推奨

第1章 GRADE システムを用いたエビデンスの質と推奨 96

第2章 CQ 1 早期パーキンソン病の治療はどのように行うべきか 99

- CQ 1-1** 早期パーキンソン病は、診断後できるだけ早期に薬物療法を開始すべきか 99
- CQ 1-2** 早期パーキンソン病の治療は L-ドパと L-ドパ以外の薬物療法（ドパミンアゴニストおよび MAOB 阻害薬）のどちらで開始すべきか 103
- 資料 CQ 1. 治療アルゴリズムと PRISMA flow** 107

第3章 CQ 2 運動合併症に対する治療について 110

- CQ 2-1** ウェアリングオフを呈する進行期パーキンソン病患者において L-ドパ製剤にドパミンアゴニストを加えるべきか 110
- CQ 2-2** ウェアリングオフを呈する進行期パーキンソン病患者においてドパミン附随薬（COMT 阻害薬, MAOB 阻害薬群, イストラデフィリン, ゾニサミド）を加えるべきか 113
- CQ 2-2-1** ウェアリングオフを呈する進行期パーキンソン病患者において COMT 阻害薬を加えるべきか 114
- CQ 2-2-2** ウェアリングオフを呈する進行期パーキンソン病患者において MAOB 阻害薬を加えるべきか 116
- CQ 2-2-3** ウェアリングオフを呈する進行期パーキンソン病患者においてイストラデフィリンを加えるべきか 118
- CQ 2-2-4** ウェアリングオフを呈する進行期パーキンソン病患者においてゾニサミドを加えるべきか 120
- CQ 2-3** ウェアリングオフを呈する進行期パーキンソン病患者において脳深部刺激療法を行うべきか 122
- 資料 CQ 2. 治療アルゴリズムと DAT の特徴と PRISMA flow** 125

第Ⅲ編 パーキンソン病診療に関する Q&A

第1章 診断, 予後 132

- Q and A 1-1** レム睡眠行動障害, 嗅覚低下, 便秘はパーキンソン病の診断に有用か 132
- Q and A 1-2** 画像検査はパーキンソン病の診断に有用か 137
- Q and A 1-2-1** MRI はパーキンソン病の診断に有用か 137
- Q and A 1-2-2** MIBG 心筋シンチグラフィはパーキンソン病の診断に有用か 140

Q and A 1-2-3	ドパミントランスポーター (DAT) シンチグラフィはパーキンソン病の診断に有用か	143
Q and A 1-2-4	脳血流シンチグラフィはパーキンソン病の診断に有用か	146
Q and A 1-2-5	経頭蓋超音波検査はパーキンソン病の診断に有用か	148

第2章 治療総論 150

Q and A 2-1	L-ドパはドパミン神経の変性を促進するか	150
Q and A 2-2	運動合併症の発現に影響する因子は何か	152
Q and A 2-3	パーキンソン病の予後に影響を与える因子は何か	155
Q and A 2-4	パーキンソニズムを出現・悪化させる薬物は何か	158
Q and A 2-5	悪性症候群の予防・治療はどうするか	162
Q and A 2-6	外科手術や全身状態の悪化に伴い絶食しなくてはならないときにどう治療するか	164
Q and A 2-7	妊娠した場合、抗パーキンソン病薬はどのように調整するか	167
Q and A 2-8	終末期を踏まえた医療およびケアはどうあるべきか	170

第3章 運動症状の治療 174

Q and A 3-1	振戦の治療はどうするか	174
Q and A 3-2	peak-dose ジスキネジアの治療はどうするか	177
Q and A 3-3	オン/オフの治療はどうするか	181
Q and A 3-4	no on, delayed on の治療はどうするか	183
Q and A 3-5	off period ジストニアの治療はどうするか	185
Q and A 3-6	すくみ足の治療はどうするか	188
Q and A 3-7	diphasic ジスキネジアの治療はどうするか	192
Q and A 3-8	姿勢異常の治療はどうするか	194
Q and A 3-9	嚥下障害の治療はどうするか	198

第4章 非薬物療法 200

Q and A 4-1	手術療法の適応基準は何か	200
Q and A 4-2	手術療法を考慮するタイミングはいつか	200
Q and A 4-3	視床下核脳深部刺激療法 (STN-DBS) と淡蒼球内節脳深部刺激療法 (GPi-DBS) の使い分けはどうするか	204
Q and A 4-4	運動療法は運動症状改善に有用か	211
Q and A 4-5	教育、カウンセリング、食事、サプリメントなどの非薬物療法は症状の進行予防や運動症状改善に有用か	214

第5章 非運動症状の治療 217

Q and A 5-1	日中過眠の治療はどうするか	217
Q and A 5-2	突発的睡眠の治療はどうするか	220
Q and A 5-3	夜間不眠に対する治療はどうするか	222
Q and A 5-4	レム睡眠行動障害の治療はどうするか	225

Q and A 5-5	下肢静止不能症候群（むずむず脚症候群）の治療はどうか	228
Q and A 5-6	うつ症状の治療はどうか	230
Q and A 5-7	不安の治療はどうか	234
Q and A 5-8	アパシーの治療はどうか	237
Q and A 5-9	疲労の治療はどうか	241
Q and A 5-10	幻覚・妄想の治療はどうか	245
Q and A 5-11	衝動制御障害, ドパミン調節障害の治療はどうか	250
Q and A 5-12	認知症が合併した場合の薬物療法はどうか	254
Q and A 5-13	抗コリン薬はパーキンソン病患者の認知機能を悪化させるか	257
Q and A 5-14	起立性低血圧の治療はどうか	259
Q and A 5-15	排尿障害の治療はどうか	262
Q and A 5-16	便秘の治療はどうか	265
Q and A 5-17	性功能障害の治療はどうか	268
Q and A 5-18	発汗発作の治療はどうか	270
Q and A 5-19	痛みの治療はどうか	272

第 6 章 将来の治療などの可能性 274

Q and A 6-1	磁気刺激, 修正型電気痙攣療法は症状改善に有効か	274
Q and A 6-2	細胞移植は症状改善に有用か	277
Q and A 6-3	遺伝子治療は症状改善に有用か	280

索引		282
----	--	-----